

槐

かい

岡井省二創刊

平成23年10月号

平成二十三年十月一日発行 第二十一巻第十号 通巻第二四四号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



炎天下

高橋将夫

海原を耕して行く土用波
駆け込んできて涼しげな顔でゐる
神々も昼寝してゐる大和かな
ポセイドン浜木綿の花摘みにきし

解かれたる帯が結界夏の月
秘め事も氷菓もこぼれやすきもの
薔薇の棘愛するものを傷つけず
炎帝も竜宮城は攻められず
金魚売金魚じまんをしてをりぬ
金銀の鯉と緋鯉がゐて虚し
草も木も土もなき道炎天下

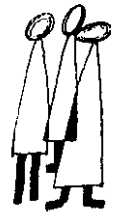
槐安集

水野恒彦

炎天に踏み出す吾の屈折率
蟻蚶飛ぶ日暈大きくなつてきし
戦^{いくさぶね}船水漬くモノクロ八月の
耕衣忌のダチュラの喇叭開きけり
鶏頭や柩のやうな貨車が過ぐ

延広禎一

鳳凰の龍に抱かるる神輿鍊り
月下美人にめくばせしをる琴座かな
青柿の蒂を繋ぎて土に円
貴人口蛇の蛻の置かれある
姉川にけぶりて咲ける烏瓜



加藤みき

夏帽のリボンに滲む潮かな
花樽ひそやかに咲き散りゆけり
海坊主を十六豆にて宥む
夏豆を丁寧に茹で供へたり
花榊昨夜までの雨嘘のやう

石脇みはる

蜘蛛の糸一すじ命守りたる
風鈴と青鬼灯を山の家
しばらくは走り雨あり河鹿鳴く
布袋草どつしりと尻据ゑぬたり
沼に住むやさしきヒーロー源五郎

中島陽華

曝涼や天領の地に断髪す
青空や裸子の食ふ味酩酊
まめまめし錦小路のなまり節
梅雨の傘一角仙の使ひかな
鱧まつり漆の椀の軽さかな

一角仙＝釈迦の前身

竹内悦子

青蛙窓に張りつく呼吸かな
辣蕪の匂ひの写経してをりぬ
塩鯖を焼きし煙の中にある
噴水の裏側といふ待合せ
鳩の海茅花月夜となりにけり

栗栖恵通子

炎昼や影なき魂とすれ違ふ
宦官のおほかた細目夕牡丹
能登キリコ海をたわめて上がりけり
三伏や馬油の蓋の開いてをる
蚊喰鳥胎蔵界を洞として

大島翠木

妻の通夜雨の桜桃忌か今日は
満月の端居の人を照らしぬる
胎蔵の螢ほうたる水車かな
月光のたちそめにける曼陀羅華
七人の小人の踊り茗荷の子

雨村敏子

象嵌の禹の香炉より梅雨明くる
水滴の傍へ螢袋かな
昼寢覚この世涼しくゐたりけり
金箔をのせて鮑の踊りかな
銀漢や鶏血石を桐箱に

本多俊子

遙かより師の呼ぶ声か青葉木菟
大津波玫瑰の歌碑拾しや
生と死の境はゆかし沙羅の花
晩節のいま生き生きと白上布
遠い木の空を見てをり敗戦忌

近藤きくえ

ざわめきは風か木霊か木下闇
ひととせの蔵より目覚め祭鉾
螢恋ひ螢見ぬ夜の闇深し
土用東風子牛の舌のもしろに
吟詠の川面にひびき星涼し

近藤喜子

神神しき貌くつきりと蟬の殻
母胎より戻つてきたる昼寢覚め
鯉になるぞと燃えてゐる金魚かな
戻れなくなるか西日を突き進む
ちちははと我とのあはひ走馬燈

谷村幸子

父の書のいよよなつかし秋の茱萸
木の下に体おきたる大暑かな
青大将すべりつつ向き変へにけり
気どらずに俳画たのしむ鶏頭花
ようやくに色紙かけ替へ風涼し

瀬川公馨

梶翁の三百代言夏の暮
こんじきの苔の花あり金閣寺
太郎冠者次郎冠者をり栗の花
猛獣のやうなる女野仙人掌
沙羅双樹鳶が鷹を生んだやう

久保東海司

泳ぎ来て潮垂るる髪しぼり切る
浄め塩踏み白足袋峰の入る
雀来て茅の輪の空を囃しをる
検診の事なきを得て夕端居
海女浮いて祈りを捧ぐ終戦日

西村純太

白描の菩薩涼しき町よ
らふそくの炎のをみな業平忌
羅に習うてゐたる鏡文字
この夏はかなしびそふる祭笛
阿字となり呷字となりて蛇は野に

中野京子

脱ぎきつて真白き帯の今年竹
暝るべく焰に群るる白蛾かな
雨の日のここが明るく藪萱草
鳴く蟬と人間だけが生きてゐる
七十余年の速さ短かさ更衣



槐市集

有松洋子

蟻地獄千年寺の裏に飢ゑ
水一滴口にふくみし蟬の鳴く
炎天や吾に鋭き犬齒欲し
海熱し水母の器管光りをり
人体図を見てゐる跣足の妊婦

犬塚芳子

天邪鬼私は泳ぐあめんぼう
蟻穴に大きすぎたる獲物かな
浦島草アンテナ人の世をさぐる
赤帽の男が一人晩夏光
亡き夫の星にはなれず月見草

犬塚李里子

鎌倉四句
白南風や段葛へと吹き抜けり
万緑の山門に巨き額の文字
弘安の古刹にしのび濃紫陽花
黒南風や大佛の慈眼一しづく
ちちのメッセーじより蟬時雨

井上静子

大屋根に色を伸ばせし凌霄花
たつぷりと茄子に水やる安堵かな
涼爽竹桃の揺れ映す
白皿にパスタ盛らるる梅雨晴間
紫蘇洗ふ部屋に香りの残りけり



槐集

高橋将夫選

鉾の灯のともされ四条浮きあがる
枚方 熊川 暁子

神鷄は人間ひとあひよそに清水飲む

明易し夢の逃げゆく窓明り

潮騒の紺をたためる土用風

梅干の百面相や兵馬俑

一刀の間合を習ふ燕の子
守口 柳川 晋

ギヤマンを満たし珊瑚の礁とす

練達の魔女三人のぬなは尊舟

蜘蛛の囿の真ん真ん中に居て修行

言霊の幸ふ鄙の噴井かな

宮水に洗はれてをり蛇の衣
寢屋川 前田美恵子

村雨橋渡り切つたる百足かな

人の世の重荷を捨てし更衣

半夏生龍の目にある五寸釘

恙無く暮す母をり終戦日

夕端居漬物石の積まれある
摂津 中田禎子

青梅や大笊干してありにける

海境や南部風鈴鳴りやまず

昼顔や赤子のをらぬベビーカー

露草や鉄輪の女通りしか

宵山の動かぬ鉾を見てまはる
守口 岩下芳子

紙魚ひとつ追ひかけてをる世界地図

火たたきの言葉消えたる終戦日

猫の手を借るほどでなし書を曝す

張り替へし網戸に蟬の腹動く

額の花真昼の星となりゐたる
枚方 近藤紀子

茅の輪ぬけ濁世に別れ告げにけり

さくらんぼいつも気嫌のよき子なり

羽脱鳥用あり顔で近づき来

風やみて十葉の花白さ増す

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

明易し夢の逃げゆく窓明り 熊川 暁子

夏至は最も夜が短い。夜明けが早くなる感じを「明易し」というわけであるが、どうやら窓辺に明かりがさして夜が明けてきたようだ。ぼんやりと目が覚めて、ついさっきまで見ていた夢が窓辺へ逃げていくようだという。夢から覚めていく感じが実に見事に表現されている。

〈鉾の灯のともされ四条浮きあがる〉の句では、四条の灯が鮮やかに目に浮ぶ。〈神鶏は人間よそに清水飲む〉の句では、人の世のしがらみをよそに清水飲む神鶏の姿がなんともシニカルである。〈潮騒の紺をたためる土用風〉の句では、「紺をたたむ」が土用風の様子をうまく表現している。〈梅千の百面相や兵馬桶〉の句では、梅千の百面相と兵馬桶の対比がおもしろい。

「俳句は精神の風景、存在の詩」と思っている。眼前の景も含めて、作者の心に湧いてきた景の中から、「もの、こと」の本質・核心に迫っていると直観した景を言葉にしたのが「存在の詩」であり、それを有李定型の器に納めたものが私にとっての俳句。それを前提に、次の点を重視して選んでいることは、これまでも折りにふれ言ってきた。①景が簡潔、明快であること。句が「存在」を捉えているとしたら、その景は単純明快なはずである。そもそも真理は単純でシンプルと考えるから。②景に深さと広がりがあること。その景が「存在」を捉えているなら、その景はおのずから深さと広がりを持つているはずである。作品に連想による広がり、背景による深さなど、読者が観賞するに十分な空間がほしい。③新鮮さとオリジナリティー。

あくまでも作者の精神の風景だから、作者ならではの視点、表現がほしい。また、真理、本質は既に常識になっていることも多いだけに、なおさら作者ならではの視点が大切と考える。

これらの観点から作品をもう一度見てみると、掲句はどれも極めて簡明。少し難しい言葉といえ、人間（ひとあい）ぐらいのものである。それに、なにより、どの作品にも作者ならではの視点、表現があるところに感心させられた。

一刀の間合を習ふ燕の子 柳川 晋
燕の飛翔は見ているだけで爽快。子燕も上達してスレスレのところで急旋回できるようになるわけだが、それを「一刀の間合」とみたところが痛快。佐々木巖流の燕返しを思う。

宮水に洗はれてをり蛇の衣 前田美恵子
蛇の抜け殻をきれいな水で洗っているという。灘酒の醸造に用いられる宮水で洗われてやわらかな衣になっていくようだ。

海境や南部風鈴鳴りやまず 中田 禎子
黒がねの南部風鈴が鳴っている。その場所が海境というから尋常でない。海神と人の国とを隔てている境界で鳴っているというのである。

宵山の動かぬ鉾を見てまはる 岩下芳子
派手な鉾回しでなく、止めてある鉾に焦点を当てたところが手柄。

額の花真昼の星となりぬたる 近藤 紀子
額の花を真昼の星とは素晴らしい感性。俳諧からメルヘンの世界に入る。